

# 街通信

齋藤純

車で十分ほどのところに川崎市岡本太郎美術館ができた。近いからといって行けると思っただけで、半年あまりが過ぎてしまったが、(万歳七唱 岡本太郎の鬼子たち)という企画展に村上善男氏(ユラージュのようなもの)の(釘打チシリーズ)と評される一連の作品である、「ニッポン」(「内久井名村」)に爆竹がすらすらと貼(は)りつけられているのを見つけたときは、心のなかで手を打ちつつ吹きだしてしまっていた。やってくるなあ、と感嘆し

たのである。端正な佇(た)たずまいのなかに、雪深い東北の匂(にお)いや必ずしも明るくはなかった歴史の重さを垣間見ることができると、もう長いことお会いしていないが、村上さんの仕事はどきおりに目にしてきたし、「著書」の「萬籟五部」土沢から茅ヶ崎へ(有隣新書)や「萬籟五部を辿って」(創風社)を読んだからには真作の見方が変わった。先月、村上さんの新刊「赤い鬼」(創風社)が出た。サブタイトルに「岡本太郎」とある。この本は、岡本太郎についていろいろな媒体に書いた文章を一通りまとめたものだが、村上善男という作家の目が太い節(ふし)になって一本通っている。改めていうまでもなく、作家の目とは、作家の精神にはかならない。ぼくは「岡本太郎の本」(みすず書房・全四巻)を愛読しているが、「赤い鬼」のなかにはこれとは別の岡本太郎がい

## 画家の著作

たのである。端正な佇(た)たずまいのなかに、雪深い東北の匂(にお)いや必ずしも明るくはなかった歴史の重さを垣間見ることができると、もう長いことお会いしていないが、村上さんの仕事はどきおりに目にしてきたし、「著書」の「萬籟五部」土沢から茅ヶ崎へ(有隣新書)や「萬籟五部を辿って」(創風社)を読んだからには真作の見方が変わった。先月、村上さんの新刊「赤い鬼」(創風社)が出た。サブタイトルに「岡本太郎」とある。この本は、岡本太郎についていろいろな媒体に書いた文章を一通りまとめたものだが、村上善男という作家の目が太い節(ふし)になって一本通っている。改めていうまでもなく、作家の目とは、作家の精神にはかならない。ぼくは「岡本太郎の本」(みすず書房・全四巻)を愛読しているが、「赤い鬼」のなかにはこれとは別の岡本太郎がい

### 眼光が語るもの

うちに帰って聞かなく、ある出版社の編集者から電話があった。「著書の打ち合わせで画家の村上善男先生とお会いしたのですが、

## 文章で書いた自画像

あの方は盛岡の「出身」だから、もしやと思って」

ぼくを知っているか尋ねたところ、「知っているも何も」と村上さんが破綻されたという。さよふりとおひらいた目で、こちらの心の奥まで見通すように見つめた村上さんを懐(おぼ)えて、ぼくは小学生が中学生だった。村上さんは編集者だ。「じっと見つめられた」を憶えて「います」と抱っしやっしたそとだ。二人とも

目を記憶していたというところが、おかしい。ぼくは子供心にも画家の目がどういふものなのか知りたくて、そんなふうに見つめたのだから、もう長いことお会いしていないが、村上さんの仕事はどきおりに目にしてきたし、「著書」の「萬籟五部」土沢から茅ヶ崎へ(有隣新書)や「萬籟五部を辿って」(創風社)を読んだからには真作の見方が変わった。先月、村上さんの新刊「赤い鬼」(創風社)が出た。サブタイトルに「岡本太郎」とある。この本は、岡本太郎についていろいろな媒体に書いた文章を一通りまとめたものだが、村上善男という作家の目が太い節(ふし)になって一本通っている。改めていうまでもなく、作家の目とは、作家の精神にはかならない。ぼくは「岡本太郎の本」(みすず書房・全四巻)を愛読しているが、「赤い鬼」のなかにはこれとは別の岡本太郎がい

もつとも、岡本太郎を知るには、作品に接すれば事足りる。それもなるべく多くの作品とじっくり付き合うことが望ましい。ぼくが岡本太郎の著書を読むのは、作品を理解するうえでサブテキストとしてではない。作品と切り離してではない。作品が十分に面白いから、岡本太郎は東北に異様なまでに閉入れをした知識人(知識人など書いては岡本太郎が墓から出てきて怒るかもしれない)の一人だ(ほかに司馬遼太郎がいる)。

### 東北を洞察して

確かに「赤い鬼」からは岡本太郎の知られざる一面を知ることができると、それ以上にぼくは村上善男という一人の作家の足跡を知る手がかりとしてこの本を読んだ。この本は村上さんが文章で書いた自画像だと思っ。もちろん、自身のことだけを語っているわけではない。岡本太郎について書かれた文章から、ぼくは作家

村上善男を眺めとらうとしたはず、村上さんにとっては迷宮的な読者かもしれない。岡本太郎にお前はさ(東北)で「東北」で「東北」と言われた村上さんは、東北の風土をテーマに深い洞察の足跡を残してきた。そんな知の営みの断片が、この本から伝わってくる。

読後、もう一度村上さんの作品が見たくなり、再び岡本太郎美術館に行つた。館内には小学生くらいの子供が多い。こんなには子供が多い美術館を僕は他に知らない。だから、展示室の隣の女性たちは忙しそうだった。しかも、その子供たちが岡本太郎の作品を大人よりも楽しんでる。

子供たちが制作した岡本太郎へのオマージュというような展覧作品がロビーに展示してあった。どれも力があって、愉快で、見ていると、正直なところ、あの壁紙を見てしまつと自分自身がささか情けなくなる。そんな刺激を与えてくれる場所として、ぼくはこれからも「」を訪れるだろう。

(作家・盛岡市出身、川崎市在住)

毎月一回掲載します



# 岩手日報

夕刊

岩手日報社  
盛岡市内丸3番7号  
郵便番号 020-8522  
電話代表019(653)4111  
©岩手日報社2000